東南アジア研究　第6巻 第4号　1969年3月

カンボジアの仏教

藤吉慈海

Buddhism in Cambodia

by

Jikai FUJIYOSHI

はしがき

カンボジアはインドシナ半島の西南部にある立憲王国で，面積は181,035 km², 人口5, 740, 115人（1962年調査），その人口密度は 32人/km² で，首府はプノンペンにある。その自然的条件は，東部にアンナン山地南部の標高 1,000 m 内外の諸台地があり，タイのコーラート地方との国境には，標高 1,000 m 以下のダン・レク山地がある。西南のシャム湾に臨むカルダモン山地は夏の南西季節風をさえぎっている。これらの山地に囲まれた低地は，かつて浅い内海がメコン川によって埋め立てられた平らかなデルタであり，広大なトンレ・サップ（大湖）はメコン川の増水を調節する天然の調整池となっている。この地域は典型的な熱帯季節風の吹くところで，気温は年中平均 25°C 以上を示すが，6月から10月までは南西季節風の支配する雨季で，他は北東季節風の卓越する乾季となる。しかし降雨量は地形によって南西季節風がさえぎられるため，平地部ではすくなく，年間 1,000 mm 内外にすぎない。冬の乾季は乾燥がはげしく，森林は熱帯落葉樹林で，草地の発達もいちじるしい。その間に散在する沼池で淡水魚をとる村童の風景が，かつての日本の貧しい農村を思わせる。

住民の約75%はカンボジア人で，インドシナの古い住民であるクメール族 Khmer[1] の後裔で，9～12世紀にはヒンズー文化を受けいれて，アンコール Angkor に大規模な寺院や都市をつくったが，今日ではタイ国から移入された小乗仏教といわれる長老派 Theravada 仏教がさかんで，国民の生活に深く根をおろしている。このほか小数民族としてはチャム族，タイ

1) クメールとカンボジアとは同一民族をさすもので，クメールとはカンボジア人が自らの民族を呼ぶ土着の言葉で，カンボジアとは「カムブの子孫」(Kambu-ja → Kamboja, Cambodge etc.) という語義で，これはこの民族の建国説話に基づいており，欧州人が用いた名称である。中国の記録ではカンボジアの地域を真臘と呼び，また高蜜・高綿と写しているが，また古くから印度支那半島の南端部を扶南といった。

族，カー族，プノン族，チドン族などがおり，その他ベトナム人約50万，中国人約30万が住んでいる。

この国はその東と西をタイ国とベトナムにはさまれ，西南の海岸線に山脈がせまり，あたかも内陸国家のごとき観がある。このような地理的条件が，この国の政治的性格にも大きな関係をもっているようである。すなわち常に強力な両国にはさまれ，去就に迷いつつ過去数百年を経てきたが，第二次大戦で，また敵対するフランスと日本との勢力にはさまれ，現在は自由主義陣営と共産主義陣営の中間に立たされている。中立主義はこの国の存立を全うするために宿命的なものとも考えられる。そのような中立主義の背景に，この国民の精神生活を陶冶してきた仏教の平和主義と中道主義とが，何程か影響を与えているかどうか，いろいろの角度から検討してみなければならぬ問題である。

I　カンボジアの過去と現在

この国の歴史は古く，1世紀ころの扶南の建国にはじまる。[2] 漢文史料によると，[3] 撲趺（担袂？　インドのタームラリプティ Tāmralipti）国出身のバラモンのカウンディンヤ（Kaundinya 混塡 Houen T'ien）が，霊夢によって神弓を授かり，商船に乗ってこの地に来て，女王の柳葉 Lieou-ye を征服し，これを妻として国をひらいたと言われている。この伝説から推測して，この国もまた，他の多くの東南アジア諸国と同様に，インド文化の影響下に成立したことがわかる。その後，大将の范師蔓 Fan Che-man (Srimara ?) が王となり，近隣諸国を攻め，扶南大王と称し，マライ半島まで征服し，さらに下ビルマを攻めようとしたが没した。3世紀前半の范旃 Fan Tchan の時代には，呉使の朱応 Tchou Ying, 康泰 K'ang T'ai がこの国に来て，中国やインドと交渉をもった。4世紀末から5世紀初期には，インドからバラモンのカウンディンヤ Kaundinya（憍陳如 Kiao-tch'en-jou）が来て王となり，インド風に改革した。5世紀から6世紀前半にかけて，カウンディンヤ・ジャヤヴァルマン Kaundinya Jayavarman（憍陳如闍耶跋摩），ルドラヴァルマン Rudravarman（留陁跋摩）が王となり，中国と通交した。以後は王名がわからないが，新興の真臘に圧迫されながら7世紀中葉まで存在していた。この国の中心はメコン川の下流で，コーチシナのオケオの遺跡はその貿易港と言われ，Rudravarman の都はアンコール・ボレイ Angkor Borei らしく，唐初にはバ・プノム Ba Phnom に比定されている特牧城に都していたが，真臘に追われて，南の那弗那城に移った。

扶南にかわって勢力をのばしたのは，メコン中流に興った真臘である。はじめ扶南の属国で

2) P. Pelliot, "Le Fou-nan," *BEFEO* (1903), pp. 248～303. この論文は古代扶南に関するあらゆる問題を取扱っている。

3) 一般に梁書54，扶南伝，隋書82，真臘伝，周達観の『真臘風土記』があげられる。

あったこの国は，梁の大同年間（535〜545）には独立していたらしい。6世紀末には扶南王の子孫ブハヴァヴァルマン Bhavavarman 一世が王となり，その弟と共に，次第に領土をひろげた。7世紀初期のイーシャーナヴァルマン Īśanavarman 一世は，伊奢那城に都し，扶南を攻めてその中心部に達し，はじめて隋に通じた。扶南との争いは次の Bhavavarman 二世時代まで続いた。ついで Jayavarman 一世（7世紀後半）が続いたが，真臘の統一時代はこの王で終わり，7世紀と8世紀には分裂した。南部の低地には水真臘，北部の山地には陸真臘が拠ったというが，水真臘は数王朝が成立したらしい。8世紀の末には，この水真臘の小王朝にシュリー・ヴィジャヤ Śrī Vijaya の勢力が及んだ。真臘の発祥地については，従来のラオスのバザック Bassac 説に疑問が出されており，その中心地は Bassac Īśanapura のほか，南の扶南の旧地も重要であった。その領土であった現カンボジア領とその周辺には，当時の建築，彫刻，碑文が見られ，Īśanavarman のころから，クメール語の碑文が現われた。

9世紀に入ると，ジャワから帰った Jayavarman 二世（在位802〜50）がこの国を統一し，いわゆるアンコール時代がはじまる。この王は802年にプノム・クレン Phnom Kulên で即位し，ジャワからの独立を宣言して，新たにデーヴァ・ラージャ devarāja（神王）の儀式を創始した。彼の統一は，トンレ・サップ北岸を中心とし，水・陸真臘の旧地全体には及ばなかったが，並立諸王朝も，その後次第に統合された。9世紀末のヤショーヴァルマン Yaśovarman 一世（在位889〜900）は，首都ヤショーダラプラ Yaśodharapura（旧アンコール・トム）を建て，また領内の各地に記念碑をたてた。15世紀まで，都はほとんど動かなかった。一時コー・ケルに移された都を再びアンコールにもどした10世紀中頃のラーゼンドラヴァルマン Rājendravarman のときまでに統一は終わり，西方，北方に発展しはじめたが，11世紀初めに従来の王統をおしたてて王となった。マライ半島リゴール Ligor 出身のスールヤヴァルマン Suryavarman 一世（在位1002〜50）のときには，明らかにメナム川流域に進出していた。11世紀末には，再び王統が交代し，Suryavarman 二世（在位1113〜45以後）は，トンキンの李朝や，その南のチャンパー Champa を攻め，後者を4年間支配した。北方では中部ラオスまで支配したらしく，西方でも，この頃クメール人がメナム川上流域を攻撃している。国内ではアンコール・ワット等の大規模な建築が行なわれた。その後，一時勢力が衰え，1177年にはチャンパーの攻撃で首府がおちたが，この衰勢を挽回して，この国の最後の繁栄をもたらしたのは Jayavarman 七世（在位 1181〜Ca. 1220）である。この王は，チャム人を追い，チャンパーを17年間支配し，国内では首都を再建した。現在のアンコール・トムがそれである。そして彼は各地に神像をたて102におよぶ病院をつくり，要地を結ぶ道をひらいた。その神像はメナム川下流域に，病院はラオスのビエンチャン付近にまでおよんだ。この王以後は次第に衰え，13世紀末にはスコータイにメナム川方面から追われた。この頃，元使に随行して周達観が

来て（1296〜97），『真臘風土記』[4] にこの国の事情を記している。14世紀中期以後，西隣のアユタヤの圧迫が増し，ついに1431年首都アンコールが放棄され，アンコール時代は終わった。なお，14〜15世紀には，明朝と通交した。この時代のこの国の中心は現カンボジア領およびその周辺であるが，そこには中央集権的な郡がおかれ，その他の属領には，アンコールの王と種種の関係で結ばれた土着の首長が存在した。真臘の時代には郡がなく，多少独立的な数十の都市が真臘の王に服していたのとは対照的である。また官制も，真臘の場合よりととのっていたらしく，ただ人名に序列を示すらしい数種の単語がつくこと，寺院に多数の人間が寄進することなどは共通である。

アンコール放棄後も，シャムの圧迫が続いたが，16世紀にはアン・チャン Ang Chang 一世（在位1505〜55）の積極的攻撃が成功して，一時小康を保ち，ロヴェック Lovêk に新都を造営した。しかし，再びシャム，ラオスの圧力がまし，1593年シャムの攻撃にあって，ロヴェックは陥落した。17世紀はじめ，チェイ・チェッタ Chey Choetha 二世（在位1618〜28）は，ウドーンに都したが，シャムとの戦いに敗れ，またこの頃から安南の阮 Nguyên 氏と接触し，コーチシナに対するベトナム人の侵透が始まった。この王以後，17〜18世紀は王位が不安定で，阮氏の推す王と，シャムの推す王が対立して，国内は混乱した。この間に，阮氏は中国移民を利用し，コーチシナを徐々に併合し，シャムはこの国に宗主権をもち，西北地区を直接支配した。19世紀に入り，阮氏のベトナム統一ののち，この国は阮朝とシャムに両属し，この国をめぐって，両国はたびたび衝突したが，1847年に両国はアン・ズオン Ang Du'o'ng（安陽王）（在位1845〜59）を認めて和解した。

この国へのヨーロッパ人の渡来は，16〜17世紀のポルトガル，スペインの宣教師をはじめとして，17世紀にはオランダ人の商業活動が見られ，また日本人も活動したが，永続しなかった。しかし19世紀後半に，フランスはコーチシナを領有すると，阮朝に代わってシャムとこの国を争い，1860，84両年にノロドム Norodom 王（在位1859〜1904）と条約を結び，この国を保護領とし，数度の反乱をおさえて，種々の改革をした。1897年インドシナ連邦に加わり，1907年シャムから西北地区を返還されたこの国は，フランス植民地として統治されたが，第二次大戦中，1945年日本軍の「仏印処理」の結果，一時，独立宣言がなされたが，終戦後，再びフランスの監督下におかれ，様々な曲折を経て，ようやく自主権行使がゆるされた。1947年憲法を発布して立憲君主国となり，1949年フランス連合内での独立が認められ，1950年に各国の承認を得，1953年にようやくフランスの支配から脱し，完全な独立国となった。

このような歴史をもつカンボジアにおける仏教の地位はいかなるものか。それはこの国の近

4）説郛巻39所収。元の周達観が1296年元使にしたがってカンボジアに渡り，翌年帰国した。その間の見聞録で，ペリオのすぐれた研究がある。P. Pelliot, *Mémoires sur les countumes du Cambodge de Tcheou Ta-Kouan* (1951).

代化にいかなる役割を果たしているであろうか。この国の政治と宗教との関係を中心にして，この問題を考えてみなければならないと思う。

II　現代カンボジアの政治情勢

第二次世界大戦中から戦後にかけて，カンボジアには三つの大きな政治団体があった。[5] その第1は，歴代のカンボジア王家を中心とするカンボジア政府である。その代表的人物は，かつてのカンボジア国王，現在の国家元首ノロドム・シアヌーク Norodom Sihanouk である。その立場は穏健な民族主義ということができる。1941年19才のときフランス植民地政府のはからいで王位につき，以後十有余年，賢明な柔軟性のある態度で内外の問題に対処してきた彼は1955年王位を退き，4月に政治団体を結成した。これはサンクム・レストル・ニム（Popular Socialist Community，人民社会党）とよばれ，その目的とするところは「父祖の国クメールの子としての団結の実現」を国民全体に呼びかけんとするものであり，厳密には政党というべきものではない。その主張は，三つの至上主義，すなわち国民と宗教と王位との真の意味を追求し，それを実現せんとするものである。そして社会的，経済的，文化的発展を促進することにより，国民の道徳心と生活水準の向上を目指すものである。これは要するに，インドシナ半島にもようやく及びつつあった共産主義および親米主義のいずれにもくみせず，あくまで民族的自覚を促さんとするもので，その立場は，国内的には王制支持，国際的には中立主義をとるものである。1955年9月11日の総選挙には，全投票の82%を獲得し，民主党，自由党，共産党，その他，多数の独立政党を完全におさえて政権を担当し，今日に至っている。

第2のグループは，インドシナ戦争末期におこったクメール・イサラク（Khmer Issarak，自由カンボジア）と自称するものである。タイとの国境付近に勢力をはり，1947年9月，シアヌーク王政府とは別個に，自由カンボジア政府なるものを樹立した。彼らは僧侶や民間人の中のインテリを中心とする過激的民族主義者のグループで，当時のシアヌーク王政府の柔軟政策に反対して，対仏完全独立を主張し王制に反対した。その最高指導者ソン・ゴクタンは仏教僧であった。しかし間もなくこれは容共派と反共派に分かれた。前者はベト・ミンやパテト・ラオと連絡をとっていたが，ジュネーブ休戦協定成立後，人民党に吸収され，その後目立った動きは示していない。むしろこれ以後にカンボジア政情に大きな波紋を投じたのは，ソン・ゴクタン，およびダブ・チュオン等の反共派であった。1953年シアヌークの努力により対仏完全独立が実現する頃になって，その勢力は一時弱まったかに見えたが，その後，依然共和制の主張と，中立政策に対する反対から，親西欧色を帯び，1959年1月に露見したいわゆるバンコク計画，同年2月の政府転覆未遂事件，同年8月の王室内爆烈事件等は，いずれも，米・南ベトナ

5）民主主義研究会『現代東南アジアの宗教と政治』（昭和38年12月）参照。

ム・タイ等の後援をうけたこの派の計画であると見られている。

国境問題でタイとは国交断絶の状態を続け，また住民問題やベトコン問題，さらに仏教徒弾圧事件にからんで，南ベトナムともうまくゆかなかったが，米ソ両国やわが国に対しても，たえず変化のある態度をとり，国内的には物価の上昇など，外交上および経済上の問題はあるが，独裁シアヌークの手腕により，内政的にはいちおう平穏であると言えるであろう。

Ⅲ　カンボジアの宗教[6)]

古代クメール民族の宗教については，前述したようにインドからこの国にやってきた王がこの国の女王と結婚して国をひらいたという伝説が，この国の文化や宗教がインドから来たものであることを想像せしめる。バラモン教 Brahmanism と仏教 Buddhism はインド文化の最も重要な要素であるが，それらがこの国に一たび移植されると，この国の人々の深い信仰心を培い，今日もなお生きた信仰としてさかえている。もちろん古代カンボジアにおいては，他の諸国におけると同様に，地・水・火・風などのような自然的要素や精霊 Spirit 等への信仰があった。森や山の中に福の神がいると人々は本当に信じていたようである。これらの精霊崇拝の伝統が今日もなお残っていることによって，そのことがよく推測される。

仏教がクメール民族に受容されることによって，多くの土俗的迷信的要素は除去されたと思われるが，一方，仏教自身もまたこれら土俗的信仰と習合することによってこの地域に強く根をはった。したがって，この国が政治的に危殆に瀕したときにも，仏教はバラモン教と共にあまり打撃をうけることなく，発展することができたと考えられる。

仏教の伝承によると，仏陀の滅後218年（B.C. 268年）たってアショカ王 Asoka はマガダ国の王位につき，パータリプトラ Pātaliputra（華氏城，今日のパトナ）に都した。王は仏教を保護し，B.C. 251年に第3回の仏典結集 The Third Buddhist Council を行ない，その後伝道師を海外に派遣した。セイロンに伝わる資料によると，ソーナ長老 Sonathera とウッタラ長老 Uttarathera の2人はスバルナブーミイ Suvarnabhūmi に派遣された。これらの資料のほか阿育王法勅碑文がインド各地に発見され，そのことの確実性を加えているが，Suvarnabhūmi がインドの東方を指すことは一致しているが，果たしてどこを指すかについては定説がない。Suvarnabhūmi とは「黄金の国」という意味であるから，インド人が Suvarnabhūmi に来たというのは，宗教的目的というよりも黄金を得るためではなかったかとさえ言われている。学者はこの黄金国を今日のビルマ・タイ・マラヤ・スマトラ等各地に比定しているが，定説はない。

6) この章の叙述は主として Ven. Pang Khat, "Buddhism in Cambodia," *Center of Buddhist Studies in Cambodia* (Phnom Penh, Buddhist Institute, 1963) により，多少の私見を加えた。

セイロンの資料では，仏教は B.C. 309年にカンボジアに定着したとしている。したがってクメールは Suvarnabhūmi 即ち東南アジアの一部であったことになる。しかしいつどのようにして仏教がカンボジアに移入されたかについて書いたものは何も存在しない。この時代，カンボジアは“山の（王）国”と呼ばれ，シナ人はこれを扶南 Fu-nan と言った。首府は T'o-mou といい Baphnom の故地で，今日の Phnom-Ksach Sa の丘であるといわれている。歴史的な資料は失われているが，ただベトナムの Nha-trang 州の Vo-canh，カンボジアの Takeo 州の Dambang Dek，同じ州の Tonle Bati，ベトナムの Prasat Pram Lveng の4箇所に碑文がのこっているだけである。あるものはバラモン教に関するもの，またあるものは仏教に関するものである。これらの碑文に加えて，P. Pelliot によって翻訳されている中国の資料がある。それによると扶南は第1世紀に建国している。しかし，もしも G. Ferrand の説を信ずるならば，インド文化がカンボジアへ移入されたのは，仏紀第3世紀すなわち B.C. 250年頃のことである。中国資料によると，康泰と朱応の2人が使節として中国から3世紀のはじめ頃にカンボジアにやって来た。

上述の記録を比較することによって，次のような結論に達する。すなわち扶南は大きな湾のおく深く，東は臨邑 Ling-yi（チャンパー）と西はインドと境して建てられた。使用した文字はインド系のもので，人々はバラモン教と仏教を信奉し，石や銅で神像等をつくることを知っていたと見られる。忌中は扶南人は頭髪を剃り，葬式は四つの方法，すなわち土葬，水葬，火葬，風葬（すなわち死体を鳥獣のくうにまかせ荒野に捨てること）もあった。

扶南はインドと臨邑とに親交をたもっていた。Kia-sang-li というインド人の商人が第2世紀の中頃に扶南に来て，この国がさかえていることを記している。そのことは中国の呉王 Wou (222～280) の支配の頃，扶南の王 Fan Tchan 范旃が第3世紀末にかけて Sou-Wou という大使をインドに派遣したことと関係がある。彼は以前はインド洋に面した扶南の港であった T'eou-kiu-li または Takkola（今日の Ta-kua-pa）から出港した。そしてガンジス河口に達するまで1年かかり，インド王の都まで川をさかのぼらねばならなかった。インドを訪問した後，彼は扶南へ帰った。その時インド王の使節をつれて帰ったが，この使節は扶南王に献ずべき贈物をもっていた。この航海は4年間もかかった。これと同時代に呉王もまた扶南に康泰と朱応の2人の使節を派遣したが，彼らは225～230年頃に到着した。そこで彼らはインド大使 Tch'eb-song と知り合い，彼からインドの礼儀や風習を学んだ。当時扶南はインドとシナの中間寄港地的役割を果たしていたと思われる。

この文献は扶南の幾人かの王や王妃のことについて述べているが，それによると柳葉 Lieou-ye という女王は非常に美しかった。中国の資料によると Houen T'ien（混塡）というバラモンが神々から与えられた弓矢をもって扶南に航行して来たので，柳葉女王は彼と戦ったが，負けたので，彼を夫として結婚した。かくて2人は最初の支配者となった。これらの事実は，

Kaundinya と Nāgī Somā について記されている My-Son (658) の碑文と相応する。Baksei Chamkrong 寺の碑文 (948) は扶南最後の王 Rudravarman のことを記しているが，これは Kaundinya と Somā 王妃の後裔である。Kaundinya の後継者たちの中で，知性と勇気で有名な Fan Man (范蔓) のことをあぐべきであろう。彼は自力で近隣諸国を征服し，扶南の領土を5～6倍に拡大した。彼はまさに Kin-lin (金隣国) を征服しようとして病死した。ベトナム国内にある Nha-trang にある Vo-canh で発見された碑文には Fan Man が熱心な仏教徒であったことを述べている。Barth と Bergaigne の著作によれば，この碑文は第2，3世紀までさかのぼるかもしれぬといわれている。なお中国資料によれば[7]，扶南王憍陳如すなわち Kaundinya 家の Chao-ye-pa-mo (闍耶跋摩) (Kaundinya Jayavarman) は478年に即位し，484年に Nagasena 比丘 (釈那伽仙) を南斉の武帝 Wou-ti のところに遣わし，金鏤龍王像，白檀像，牙塔等を献じている。彼はその時，武帝に向かって扶南国はバラモン教を国教とし，人々はシヴァ Śiva 神を崇拝しているが，仏教もまた盛んで多くの信者をもっていると述べている。さらに503年 (天監2年) に Kaundinya Jayavarman は Mantrasena 曼陀羅仙を揚都に派し梁の武帝に珊瑚仏像を献じている。[8] さらに，この Mantrasena はその年文殊般若経二巻等を訳している。[9] また扶南王は武帝の要請で2人の比丘 Sanghapāla と Mantrasena を派遣したが，彼らは三蔵経の翻訳を命ぜられたとあるが，[10] これはおそらく上記の文殊般若経二巻のことと，512年に僧伽婆羅，阿育王経十巻を訳す[11] とあるのに相応する。これらの中国資料のみならず，第5世紀末以後の扶南の碑文にも Kaundinya Jayavarman のことが出ている。Prasat Pram Lveng (srok Tuk-khmau, Prek-Russey) の碑文は，Gunavarman 王子はこの地方が泥水からできたもので，彼がこの地方を支配することを命ぜられたことを父王に感謝していることを述べている。Takeo 州にある Neakta Dambang Dek のもう一つの碑文は王妃 Kaundinya Jayavarman がこの世を捨てることを誓願し，バラモンたちのために池を掘り，住居をつくっていることを物語っている。

Kaundinya Jayavarman の死 (514) によって，その息子の Rudravarman が即位した。中国の年代紀は彼を留陁跋摩 Lieou-t'o-pa-mo と呼び，王に寵愛せられた息子であって，正当な皇太子を死にいたらしめた。その皇太子の名は多分 Gunavarman 王子で，その名前は Prasat Pram Lveng にある碑銘に出ている。王位につくや彼はしばしば中国の王室に使節を派遣しているが，その中の1人は539年に中国に到着し，扶南国には仏陀の貴重な遺物があると明している。それは3mの長さの一ふさの髪の毛である 王はこのニュースに心を奪われ，使節が

7) 南斉書58，南史78。
8) 梁書54，仏祖統記37。
9) 歴代三宝記3，開元釈教目録6。
10) Ven. Pang Khat, *op. cit.*, p. 109.
11) 歴代三宝記3，11。開元釈経目録6。

扶南に帰るとき釈雲宝 Tche-yun-pao という比丘をつけてやりその仏髪を迎えしめている。[12]

これらの事実は，第6世紀のクメールの碑文によって確証されるが，Rudravarman が仏教徒であることを実証している。この碑文は“彼は仏・法・僧に帰依し……，自ら非常に信仰深く……，すべての不浄を洗い浄めた”ことを記している。

Kaundinya Jayavarman の支配とその後継者たちの支配の下に，Rudravarman や仏陀の石像や青銅像や木像がつくられた。この芸術の中心地は Angkor Borei にある Phnom Da であった。その影響は扶南一円のみならず，海外にもひろまった。現在のベトナムの Tra-vinh 州の南にある Angkor Borei と Trapeang Veng は東南アジアの最古の石像の彫刻された中心であった。

扶南時代は仏教にとって非常に輝かしい時代であった。中国人の旅行者義浄三蔵 I-tsing (635〜713) の東南アジア巡礼記（『南海寄帰内法伝』巻第一）によると「驩州正南步行可餘半月。若乘船纔五六朝。即到匕景。南至占波。即是臨邑。此国是正量。少兼有部。西南一月。至跋南国。旧云扶南。先是裸国。人多事天。後乃仏法盛流。悪王今並除滅。迥無僧衆。外道雑居。」[13] とあるが，かつて仏教がさかえたが，悪王[14] のために，今は仏教僧はいなくなって外道のみ雑居しているというのは，すこし極端すぎるようである。

真臘 Tchen-la 時代（第6世紀〜第9世紀）

真臘時代は Tchen-la 王 Bhavavarman 一世によって扶南が征服された第6世紀中頃にはじまる。大乗仏教 Mahayana Buddhism の移入が真臘の宗教史において最も重要なことである。扶南の歴史は中国資料によることが多かったが，真臘時代になると碑文が多く，それによって史実をたしかめうる。Kompong-Thom 州の Sambor Preikuk や Īśanapura で発見された碑文は，Īśanavarman (626) の支配にまで遡るが，それは仏教について特別に記述し仏陀を守った広がった頭を持つ Nāga の礼讃を記述している。Siemreap において Aymonier によってさがし出された碑文（6〜7世紀）は観世音菩薩像が建てられたことに言及している。しかしこれらの像はあまり多くはなく二つの像が Siemreap と Kramounsar に存在していることは知られている。したがってその仏教は大乗仏教であると考えられるが Theravada Buddhism も決して衰退したわけではない。この時代を通じてバラモン教と仏教のあらゆる形が同様に発展し続けた。

Kampuchea の全盛時代（第12世紀）[15]

Jayavarman 二世（802〜869）は802年に即位し，Phnom Kulen に遷都した。真臘の二つの

12) 梁書54。
13) 義浄『南海寄帰内法伝』巻1（大正蔵経54巻，p. 205，B）。
14) 真臘王 Bhavavarman 一世を指すと思われる。
15) この国の歴史を (1) インド文化光被時代と (2) 西洋文化東漸時代に二分し，(1) を i) 扶南時代 (100-550)，ii) 真臘時代(550-800)，iii) アンコール時代 (800-1500) とし，(2) を iv) カンボジア時代 (1500-1863)，v) フランス保護国時代 (1863-1954)，vi) 近代的独立発足時代 (1954-現在) とする時代区分もある。

地方を再び併合しクメール王国の基礎をかためたこの王は Harihara を信仰したバラモンであったが，自ら Harihara であると宣言した。ともあれバラモン教と仏教とは共存し続けたが，王とその側近が同じ宗教を信奉していたわけではない。Indravarman 一世 (877〜889) の支配時代でも同じ状態であった。この頃から Kampuchea の名があらわれはじめ，それ以後この国は Kampuchea として知られるようになった(879年の碑銘)。都をアンコール・トムにうつした Yaśovarman 一世 (889〜900) は熱心な仏教徒であった。彼は大乗仏教を正式に認めたが，他のすべての宗教に対しても平等に保護を与えた。Yaśovarman のあとバラモン教を信ずる君主が続いた。しかしそのなかの一人 Rajendravarman はシヴァ神を信仰していたにもかかわらず，その第一の大臣に仏教徒をえらび，仏像の建立に心から祝福を与えた。彼の支配時代に宗教信仰の自由さは，仏教とシヴァ神崇拝 Śivaism の一種の混合に導いた。それが今日まで続いていると言えよう。

一方，Suryavarman 一世 (1002) は自ら仏教徒であることを宣言し，仏教を公式に承認したが，その側近はバラモン教を信奉し続けていた。Lavapuri の碑文 (1022〜1025) は，さらに大乗と小乗の僧とバラモンたちの間に何等の偏見なく完全な調和が保たれていたことを証明している。この時，はじめて学者たちはカンボジアに，Nāga によって守られた仏像があらわれたと言っている。

1181年にカンボジアの歴史上最も尊敬されている君主 Jayavarman 七世 (1182〜1201) が即位したが，彼はまた熱心な仏教徒で，観世音菩薩をたいへん尊崇した。この頃から王は自ら菩薩であると言った。“アンコールの微笑”とか“クメールの微笑”として有名な一種独特な神秘的微笑をたたえた唇と，半眼に開いた下向きの眼と多くの頭をもった記念像が各地に建てられたのはこの王の時である。これらの頭像は，クメール人を保護し，あらゆる不幸から守るために極楽浄土 Sukhavati からやって来た菩薩であると考えられている。かくて Prasat Banteay Kdey や Ta Prohm や Preah Khan や Bayon が建てられ，またシャムやチャンパーへ通ずる幹線道路に沿って病院等が建てられ，この町の郊外にもまた他の記念の建物がつくられた。

Ta Prohm すなわち Preah Vihear (1186) は仏教のもので，仏母になぞらえられた皇太后の像がここに安置されている。また Ta Prohm には Suryakumara 王子によって書かれた碑銘があるが，それは Jayavarman 七世の全能性をほめたたえ，また仏・法・僧の三宝を礼讃している。1191年に王は Preah Khan を菩薩に献じ，観世音菩薩の形をした彼の父 Dharnindravarman の像をここに安置した。王は Preah Khan の東に，四方が池にとりまかれた寺 Néak Péân を建てた。また王は自分自身の像を建てたが，それは病人のための医師であり守護者である仏陀に，自らをなぞらえたものである。彼はまた人間が馬にしがみついている像をつくり，それによって人間を涅槃に導く王の使命をあらわしている。Preah Khan の本体につ

いて“王はこの記念堂を敵の血の流された地点に建てた。この記念物は貴重なものを含んでいる。それはあたかも敵の手におちた土地を包むかのようにすばらしい光をなげている黄金の蓮である”と言われている。Jayavarman 七世もまた Kampuchea からチャンパーやシャムへ通ずる道路をひらいた。その沿道には約 15 km ごとに21の宿舎がつくられた。Bayon はこの世紀の末にこの王国の中心に建てられた仏教の建物で，王の黄金像がそこに安置されている。Jayavarman 七世は自ら仏教徒であることを示すために王子を含む一行をセイロンに派遣した。そのことはビルマの年代記に記録されている。それで歴史家は，この王子が Theravada Buddhism をセイロンから Kampuchea へ伝えた最初の人であろうと推測している。Jayavarman 七世の後，バラモン教は最後のさかえを示した。王たちはバラモン教を奉じたが，Theravada Buddhism の成長はそのためにさまたげられることはなかった。

第15世紀から第20世紀まで

この時期に Theravada Buddhism はカンボジアに確固たる位置を占めたが，一方，大乗仏教とバラモン教は次第にその信奉者を失い，遂に滅亡してしまった。バラモン教（Hinduism インド教という語を用いたがよいかと思うが）の寺院はパゴダ Pagoda（塔）に改造され，その壇の上にはリンガ linga（男根）のかわりに仏像がおかれた。そのような改造がなされた後も，これらの寺院はもとの名前を残しているものもある。それは Ang, Tang, Krang, Svay 等のような名前によって推測される。またバラモン教や大乗仏教に由来するある種の宗教的行事や実践は，今日もなお国民の間にのこっている。今日のカンボジアでは，天に向かって聳え立つ多くの塔があり，黄衣の僧が威厳をもって歩きまわっているので，外国人はこの国を“僧侶の国”と呼んでいる。

最も危機に瀕した時でさえ，クメール人は仏教への信仰を失わなかった。それは仏暦2494年（1950）に仏陀の弟子舎利弗・目連の遺骨をカンボジアに迎えた時に行なった盛大な祭典[16]や仏滅 2500 年の記念行事の盛大さ[17]によっても知られる。このような国民の信心深さから，彼らが武力を軽蔑する理由がわかる。国家的目的を達成するために武力に訴えず，平和的手段しか用いないことを決定したカンボジアは，中立を宣言しあらゆる種族や言語の人類を均しく愛することを宣言した。すべての人々は兄弟であり，この地上に一緒に住んでいる以上，大きな平和同盟の中で共に働くべきであるというような精神から，彼らは世界に向かって厳粛にその中立を宣言した。このことの背景に長い間つちかわれた仏教の精神があることを，全然否定してはならないであろう。

16）インドのサーンチーにおけるその祭典には筆者も参列したが，それらはアジアにおける仏教復興の気運をもりあげるものでもあった。拙著『印度セイロン紀行』（仏教文化研究所，昭和30年）p. 153 参照。

17）世界の仏教国の各地で仏暦2500年(1956年)に Buddha Jayanti（仏陀の勝利の意）と称する祭典が盛大に行なわれた。ビルマのそれについては拙著『ビルマ遊記』（仏教文化研究所，昭和32年）参照。

Ⅳ 仏教の現状

これまで子供たちは，王室の子であれ，高官の子であれ，貧民の子であれ均しくその基礎教育を仏塔のあるところでうけた。そこで彼らは読み書き算数と共に仏陀の教えを学んだ。この基礎教育がすむと黄衣をつけ，だいたい12才頃に沙弥 Shamanera（見習僧）となった。そして満20才になると比丘 Bhikkhu という完全な僧になるのである。生涯のうちに一度はこのように剃髪して仏教の教団に入り，仏道の修行をすることが，その両親から受けた恩恵に対する子としての義務であるかのように考えられた。比丘になると彼らは高等教育をうけパーリ語や仏教の教理を学んだ。この国では法衣をつけるということは一つの威厳の標準とされている。一たび法衣をぬぎ還俗して世俗生活にかえっても，彼らが僧侶として習得した仏教の知識によって，彼らは“a”とか“mong”という名前をつけられ，Pandit（聖者，学者）となることができた。このような僧院における仏教的教育の実習によって，カンボジア人は一般に慈悲深く善良であると言われている。今日では，たくさんの学校が寺院の境内やその付近に立てられ，若い人々の出家入団することは次第にすくなくなったが，多くの公立学校の生徒も仏塔に集まり，僧侶たちと接触する機会も多い。そのような接触を通して，彼らはしらずしらず仏教的知識を得ると共に，信仰心を養うことになるわけである。Theravada Buddhism が比較的合理的で，奇跡や神話性に乏しいことは，この国の迷信俗信を浄化する役割を果たしたと考えられるが，その徹底は近代普通教育の普及にまたねばならぬであろう。

仏教の祭典や国家的祭典は仏塔の境内で行なわれる。これらの行事や祭典に参加することによって互いに知り合い，同情し合い，尊敬し合うことになる。また善行をなすことや集団の協議をするために，彼らに協同の意識をもたせることになる。宗教の宣教もこのような祭典を通して行なわれ，祭りのもつ一種のエクスタシーは人々に個人的解脱感とは異なった宗教的解放感を与える。また五戒や八戒という仏教信者の守るべき戒をこの日にたもつことは，彼らの道徳生活をたかめる。不殺生，不偸盗，不邪淫，不妄語，不飲酒等のいましめは，自ら人々を高尚にする。また僧侶に供養するという習慣は，集団の福祉のために寛容な心を養うための，また強欲や利己心を克服するための，こよなき機会である。かくて仏塔のなかで集団的に取り扱われる問題は，平和を愛好する仏教的理想にかなった精神において決定される。この国の人々は死者の葬いや祭りの行列等，仏陀の教えにかなうように多くの祭りをつくった。結婚や葬式等もまた仏教的習慣にしたがうようにした。“これらの祭りはこの国を貧困にする”という批判に対し，“それはかまわない，仏教という宝を失わない限り”と答えるほどである。なお重要なことは菩薩の生涯や仏陀の前生物語についての説教がしばしば行なわれる。これが人々を深い信仰に導き，彼らを現世と来世の平和と幸福の期待に安らわせる。1956年にむかえた Buddha Jayanti と称する仏滅2500年の式典は，南方仏教諸国にとって一つの時期を画した。Thera-

vada Buddhism の伝承では，仏教は仏滅後2500年たって滅亡すると考えられていたが，実際にはかえって復興する気運を見せた。そして仏教の国際会議等が戦後，アジア諸国において開催せられ[18]，南北仏教徒の交流もあり，大乗仏教と Theravada Buddhism の相互理解を深めることになった。そのことはこの国の仏教界の指導者たちへのよき刺激と反省と激励を与えたであろうことは想像にかたくない。

この国の仏教の教団は二つに分かれている。Mahanikay と Dhammayut とである。これはタイ国仏教の延長であるが，この区別は教義の相違によるのではなく，全く教団の成立の相違によるものである。強いて言えば Mahanikay のほうが戒律を守る上でやわらかで，Dhammayut のほうが厳粛である。外から見ると全く区別がつかないが，Dhammayut の僧は托鉢に行くとき，鉄鉢 (bat) を両手で持って行くが，Mahanikay の僧は肩からかけて行くくらいの相違である。両派の寺院と僧の数は表１のとおりである。

この14年間に寺院数は増加しているが，僧侶の数は減少している。さらによく検討してみると，1949年には Dhammayut の寺には平均約20人の僧が住んでいたことになり，Mahanikay の寺には約24人の僧が住んでいたことになる。14年たって1963年になると Dhammayut の寺に平均13人，Mahanikay の寺に平均19人，両者平均して19人の僧が住んでいたことになる。寺院の数は Dhammayut のほうが６，Mahanikay のほうが148も増加しているが，僧の数は次第に減少していることがわかる。

二つの教団の長は Sanghaneayok と呼ばれ，王様から２人の Sanghaneayok が任命される。この２人の Sanghaneayok は互いに独立していて，各自自分の教団の僧と寺院に関することのみ統率している。この Sanghaneayok の下に Reacheaghanacs という称号をもった長老たちがいる。これも王様によってえらばれたもので，これらの長老によって最高宗教会議が構成されている。その人数は Mahanikay から35人，Dhammayut から21人である。そしてその下に，Mekons という宗教管区の長と，Anukons という副長がいて，それぞれの州や区の宗教的権威を代表している。これらの長は彼らの教団の指導者と Reacheaghanacs の地位

表 1　カンボジアにおける寺院と僧の数

	Dhammayut		Mahanikay		計	
	寺	僧	寺	僧	寺	僧
1946年	101	2,068	2,595	62,980	2,696	65,048
1963年	107	1,457	2,743	52,052	2,850	53,509
1964年	109	1,309	2,979	53,204	3,088	54,513

18)　第１回はセイロンにはじまり第２回は日本で開催され，遂次アジアの仏教国で開催せられている。

に対して責任をもっている。そして各寺院には，教団の長によって任命された Chau-Athikars という僧院の長がいる。この僧院の長はその僧院の僧を監督指導するのみで，僧院の経済的な事務は在俗の信者の委員会が管掌している。

宗教教育も比較的によく行なわれていて，これまで寺院は児童のための教育機関であったが，現在は普通教育をなす学校に拡大されている。仏教的教育の面では，Dhammaviniya 学校として知られている学校が開設されている。このような仏教の教理や戒律についての教育の普及が，僧院の規律を厳粛にし，クメール仏教僧の威厳をたかめるために役立っている。普通教育をなす学校に転じた学校は1963年の調査では 1,615校に及び，生徒数は 79,005人である。これらは文部大臣の監督下にあり，目下新しい教育がなされている。宗教教育に関しては宗教大臣の統率の下に，各州のパーリ語学校においてなされている。そこの教師は仏教専門学院 Buddhist Lyceum の卒業生である。近年この学校の生徒数は増加し，各州の寺院の中にある 590 のパーリ語学校で 1 万人以上の人が勉強している。仏教の最高学府はプノンペンにある仏教研究所 The Buddhist Institute であるが，これは文化省の一部になっている。ここは仏教研究のセンターであるのみならず，クメール文化研究のセンターである。これはもと Sisowath 王によって1921年に創立された Royal Library を，1930年に改組して設立されたものである。今日では多くの部門を含んでいるが，文学，宗教，美術，考古学，仏教史，風俗習慣等がその主なものである。なおこの中に The Manners and Customs Commission や The Tripitaka Commission があって，活動している。この近くに仏教大学 The Buddhist University があり，黄衣の僧がここで仏教教育をうけている。

さて，カンボジア仏教の特色を考えてみるに，その歴史を通覧して，この国の文化がインドから来たものであるということ，さらに 3 世紀から 5 世紀頃に中国と交渉があり，大乗仏教もまた行なわれたということのためにシヴァ神やビシヌ神等の信仰と共に観世音菩薩の信仰がさかんである。だいたいこの傾向が13，4 世紀頃まで続いている。第13世紀にアンコール・トムの中心寺院 Bayon を建立した英主 Jayavarman 七世[19] は熱心な仏教徒であって，自らを観世音菩薩に比定していた。したがってあの神秘的なクメールの微笑をたたえている人面像は観世音菩薩である王自身の面像である。このような面像に象徴される“神即王” devarāja または“仏即王” Buddha-rāja の崇拝が一つの特色をなしている。由来，観音の信仰は観世音菩薩の応現や再来をとくので，一種の受肉思想と相応し，王が観音と同一視されることは，観音信仰のさかんなところでは不思議なことではない。[20] かくてこのような Buddha-rāja の思想

19) 龍山章真氏は『南方仏教の様態』p. 186 に Bayon をクメール王朝最初の仏教王 Suryavarman 一世と推定しているが，高田修氏は Jayavarman 七世のときと推定している。高田修『印度・南海の仏教美術』pp. 193～202 参照。

20) 高田修氏はこの「バーヨンの人面塔が最近では一般にローケシュバラ（観音）の顔といわれているが，カンボジアの観音像に必ず見られる化仏がないので，なお疑わしい」としている。高田修『印度・南海の仏教美術』p. 201 参照。

が，具体化すると，人心を収攬するに便利であることは言うまでもない。しかし，これは宮廷仏教の一面であって庶民はやはりバラモン教や精霊崇拝等の低い信仰を保っていたことも見逃せない。その後，タイ民族の支配下に入って，ここにタイ国系の Theravada Buddhism が輸入され，それが従来の俗信を浄め，民衆の間に根をおろすにつれて，大乗仏教やヒンズー教もその影を薄くしてしまったと言えるであろう。

1947年に制定され，1956年に改定された現行憲法によれば，いちおう信仰の自由は認められながら，仏教は国教的地位にあり（第2章第8条），Queen Kossamak Nearireat も，国家元首シアヌークも熱心な仏教信者である。

かくてこの国における仏教の地位は不動であるが，それは仏教が国家権力の庇護の下にあるというだけではない。仏教は国民の精神生活や社会生活をも支配している。すべての男子は一生の間に一度剃髪して黄衣をまとう僧侶となり，寺院生活をする習慣があるし，国民は収入の20％から60％を寺院に喜捨している。しかし誰でも出家するということは，自然，僧侶の質的低下をきたし，一般民衆の信仰内容をも低下せしめる。近年，普通教育の普及と共に出家入団する人の数は次第にすくなくなってきているが，これはこの国の近代化と深い関係があると見なければならぬ。

全般的に言って，カンボジアの仏教は，制度としてはタイ国の仏教とよく似ているが，信仰内容から見ると，タイ以上に大乗仏教やヒンズー教や未開信仰の影響が強い。仏教の教義自体でも，本生譚が喜ばれ，映画等でも，それに類するものをやっている。業による輪廻説が信ぜられ，戒律は涅槃に至る道というよりも，布施と共に死後の生天のためのものである。また臨終の念仏による極楽往生の思想が導入されていることも注目される。また祖先崇拝がさかんで，祖霊を祭る年一度の大祭が安居の終りに行なわれ，この時，水祭もかねて，夕方精霊流しの風習もある。これらはわが国の盂蘭盆会を連想せしめる。戒律に関しても，その条規は厳格であるが，筆者が目撃しただけでも，かなり崩れている。そして実際には僧侶は安易無気力な生活をおくっている。中には僧侶に与えられる特典――たとえば教育における授業料免除――のために僧形生活をする者もある。彼らは法衣をつけたまま内外の学校に進学し，学位，資格をうるや否や官吏その他の栄職につくことを望む。

寺院は普通，沼に近い林の中に建てられ，比丘と見習僧が別々に住む小屋の群と，俗人のために建てられたサーラ(宿泊所)とによりなっている。学校も寺院の境内かその付近にあることが多く，寺院は民衆のために広く活用されている。僧侶の社会への貢献は教育の普及につとめたことである。フランス人が来るまでは，僧侶が民衆に対する唯一の教育者であった。僧侶は村童に礼儀や道徳を教え，文字や経文を読むことを教えた。フランス人はこれを世俗的教育に開放せんとし，1930年代に，約2,400の寺子屋のうち800以上が転換された。教育の近代化が進むにつれ，迷信俗信も次第にすくなくなったが，なおバンポット，ルプ・アラク，アブ等と

いう妖術者または巫者がいる。これらの混在する諸種の祭祀に仏教僧も参加していることがある。悪霊や妖怪の信仰もまだ残っていてペイザクは餓えた悪魔，クモク・ロンは妖怪，クモク・プレアイは悪疫の伝播者である。彼らは夕闇に出て，旅人を迷わせたりする。メザは美しい娘に化けて男を誘惑し殺害すると言われるが，この国で最も一般的なのは大地や大気の中に住む悪霊である。

V 政治と宗教

この国が国民の大部分の信奉する仏教を国教としていることは，政治の上にも仏教のもつ比重が非常に大きい。この国における現代政治の荷い手であるシアヌーク自身，その中立主義が，彼がうけた仏教教育の具現であると表明しているくらいである。かつてビルマのウ・ヌー首相がそうであったが，現代世界において，彼ほど熱心にその宗教的信念を一国の政治の上に生かさんとしている人は稀である。また戦争末期から民族主義運動を推進したソン・ゴクタンも，実は僧侶出身の人である。彼にしたがった多くの僧侶やインテリは，1952〜53年頃，この国に内戦の危機をすらもたらしている。これは宗教家の指導性の大きさをしめす一例であるが，村落における僧侶の民衆に対する指導性はやはり今日もなお大きなものがある。

この国の政治性の貧困は，近代教育の普及につとめながら，まだ迷信や俗信の駆逐に成功していない。寺院や僧侶が，学校と教育者の役割を果たしてきたことはいちおう認めねばならないが，要するにこれも政治の貧困が，教育の近代化をおくらせた結果にすぎない。

VI 仏教の現況調査

筆者は1964年12月1日から3日にかけてアンコール・ワットを中心とした宗教調査をなし，翌年2月13日から15日にかけて首都ペノンペンの宗教事情を調査した。そのわずかな印象から見ても，この国の過去と現在がいかに仏教によって色づけられているかがわかる。現在，カンボジアには Her Majesty the Queen Kossamak Nearireat がおられ，国家元首はシアヌーク殿下 His Royal Highness Prince Norodom Sihanouk the Head of the State である。シアヌークもかつて3月間 Dhammayut 派の僧となったことがあり，彼の仏教に対する信仰は堅いものがある。その中立主義が，仏教の中道主義のあらわれであり，その政策に平和主義があるのも仏教信仰に由来すると言われるが，自ら剃髪して黄衣をまとった3月間の僧院生活は，彼をしてかなり強い仏教的信念をかためしめたように思われる。この国の国旗が青・赤・青の2色を上中下段にし，その赤色の部にアンコール・ワットを白く染めぬいていることからも，この国の人々がクメール文化をいかに誇りとしているかがうかがわれる。

プノンペンでこの町の中心にある Wat Phnom を訪ねたが，これは小高い丘の上にある寺院で，仏教やヒンズー教の混淆した民間信仰の中心地である。次に市内にある Dhammayut

派の寺 Wat Patum を訪ねたが，比丘100人，沙弥100人，寺男500人，尼僧なし，説教は毎月4回，仏日に毎朝5時から4回やっている。50人くらい集まるそうである。托鉢も毎朝6時に出るが，坐禅はあまりやっていない。田舎の寺では林の中で坐禅をやっているが，全般的にあまり盛んではない。仏教の研究はさかんになったが，実践する人はすくなくなったとある僧は語っていた。迷信は次第にすくなくなり，在俗の人でも坐禅をする人はあるが，若い人はあまり興味をもっていないという。この僧は精霊や輪廻転生を信じているが，全般的に言ってこの国の仏教僧は皆そうであろう。現在は普通の学校が増加したので，出家する人が少なくなったと言う。シアヌークも僧の社会的活動を期待し，病院・学校・研究所等をつくり，仏教の僧侶の知識をたかめ，その社会的進出を促している。The Preah Sihanouk Raj Buddhist University の創立がその一つのあらわれである。1953年カンボジアが完全に独立して以来，シアヌーク殿下の率いる the Popular Socialist Community Government のもとにカンボジアはあらゆる面で新しい発足を見た。この仏教大学は1954年7月1日の Preah Raj Kram (Royal Order) と1955年10月8日のPreah Raj Krit (Royal Decree) によって創立された。それはメコン河畔の Royal Palace の前に，宗教省と Conference Hall に近い絶好の場所に建っている。仏教僧の教育の向上は国民の文盲率を低くし，仏教に対する国民の信頼度をます上に絶対的に必要なことである。そのために仏教大学をつくったが，内容はまだ貧弱なように思われた。

次に Mahanikay の寺 Wat Unnalom を訪ねたが，ここも大きな寺で，比丘400人，沙弥27人，寺男300人，説教は月に4回，午前7時と午後4時にやっている。30人から50人くらい集まって八戒をうける。坐禅はここではやっていないが，托鉢は毎朝やっている。プノンペンの寺院はだいたい大同小異と見てよいと思う。比丘と沙弥の数は1950年には約8万，1960年には約4万に減少したが，これは普通教育の学校ができて，そこに行くようになったためで，1965年には5万4千に増加していると言うことであった。仏教研究所で調査してみると，先にあげた表1のようである。

表1によると前年に比し Mahanikay の寺は236寺も増加し，僧の数も1,152人増加している。Dhammayut のほうは2寺増加し，僧の数は148人減少している。1年間にこれだけの変動があることは意外であるが，いちおう，寺院も僧も増加の傾向にあると見られる。

さらに諸学校の統計は，表2のとおりである。

表2 カンボジアにおける諸学校の数，生徒数および教授数

1964年

	学校数	生徒数	教授数
初等パーリ語学校	527	10,983	
仏教高等学校	2	499	28
仏教大学	1	112	16
Ecole de Dhamma-vrinaya	1,173		

仏教研究所の蔵書はカンボジア語の書物

が5,494，外国語の書物が18,935，貝葉が1,646というので，まだ小さなものである。王宮と美術館は見学できるので訪ねたが，クメール文化を理解するのに重要なところである。

さらに1964年12月1日からのアンコール・ワット一帯の調査の印象を記す。バンコクから京大東南アジア研究センターのジープで午前7時出発。Dom Muang 飛行場の東方を北上し，Nakornnayok, Prachinburi を経て国境の Arannyaprades に到着したのは12時30分。中食をして国境を通過するのに1時間30分を要した。ジープの入国手続にてまがかかったが，カンボジア領に入ると，道は悪く人家はほとんどない。半時間おきに国境警備兵らしい銃を背にし自転車にのった男に出合う。Sisophon でちょっと休みアンコール・ワットについたのは夕方6時30分頃であった。翌朝，見学に出かけたが，アンコール・ワットの奥の石柱に「寛永九年肥州藤原朝臣……」と薄い毛筆で書いたあとがある。[21] 千里の波濤を越えて辿りついた日本人の中には，ここを祇園精舎と思った人もいる。水戸の彰考館には「祇園精舎の図」と書いたアンコール・ワットの図があるそうである。[22] 午後 Bayon から北上し幽邃なところにある Preak Khan を見て，さらに Néak Péân を見に行く。ここはダムのようになった池の中の寺で，功徳池を連想せしめる。午後しばらく休んで Takeó を見に行く。これはかっちりしたピラミッド形の上に五つの塔のあるユニークな形式のものである。それからジープをとばして Siem-reap から東方へ Peak Ko を見る。ほとんど荒廃しているが，その先に Bakong がある。これはかなり高い石造建築で，まだいろいろのものが残っている。その東方の田舎の寺院で，ほとんど半裸体で村人と共に木材をかついだり大きな鋸で木を切っている僧たちを見る。老僧は坐ってそれを眺めながら指揮している。寺院の境内に何か家を建てるのである。こんな重労働をすることは戒律にそむくが，田舎ではやむを得ないかとも思った。この光景をスナップしようとカメラを向けたら，さすがにことわられた。これは戒律の乱れと思ったが，この国では寺院建築のときは僧が中心となって村人の援助をうけてやるとのことであった。

む　す　び

カンボジアの仏教について，この国の過去と現在を考えながら，宗教と政治の関係を中心にして見てみたが，何らまとまった結論は出てこなかった。さらによく調査して，この国の近代

21) 尾高鮮之助『印度日記』(昭和14年) p. 88, 95 によると，この寺を訪れた日本人の名やその年月日などの記録が，11個あったらしいが，私は二つくらいしか見当たらなかった。
黒板勝美「アンコールワット石柱記文について」『史学雑誌』41の8 (昭和5年) 龍山章真『南方仏教の様態』p. 200 参照。

22) 長崎の大通辞島野兼了が3代将軍家光の命をうけ，和蘭陀船に乗ってインドの祇園精舎聖跡を訪れ，それを図面に写してもち帰ったものの写しであるが，実はこのアンコールワットに詣ったのである。真臘国の大都城の傍らの精舎を祇園精舎と思い誤ったものであろう。龍山章真『南方仏教の様態』ではマガダ国とあるが，コーサラ国とすべきであろう。同書 p. 201 参照。

化と仏教の関係を考えてみなければならぬと思う。ただ現在のところ言えることは，この国の地理的条件から，この国の中立主義はかわらないと思う。この国の独立を維持してゆくためには，どうしてもこのような立場をとらざるを得ないであろう。そしてそのような中立主義の背景に仏教の中道主義とか平和思想があるということである。シアヌーク自身そのことを言明しているが，それは彼自身の仏教に対する信仰心の表現であるかも知れぬ。しかし，そこには民族主義的・国粋主義的な精神の鼓吹が含まれている。この国の独立のためには，仏教の信仰を強調することによって，民心を統一し，愛国心をたかめ，そのことによって国家を安泰ならしめんとする意図があると見ねばならぬ。仏教信仰の強調は同じ仏教国タイ・ビルマ・セイロン・ベトナム・ラオス等に対しても無意味でないどころか，友交をたもつ上の重要な手段でもあるからである。

参　考　文　献

Buddhist Institute. *Center of Buddhist Studies in Cambodia*. Phnom Penh, 1963.
Loke Wan Tho. *Angkor*. London, 1958.
le May, Reginald. *The Culture of South-East Asia*. London, 1954.
民主主義研究会『現代東南アジアの宗教と政治』東京，昭和38年12月。
高田修『印度・南海の仏教美術』東京：創芸社，昭和18年。
棚瀬襄爾『東亜の民族と宗教』東京：河出書房，昭和19年。
龍山章真『南方仏教の様態』東京：弘文堂，昭和17年。